

An illustration at the top of the cover shows the lower legs and feet of three people walking on a path made of irregular, textured stones. On the left, a person wears blue sneakers with white laces. In the center, another person wears similar blue sneakers. On the right, a person wears a light-colored, patterned skirt and red flat shoes. The path is composed of large, irregular stones with a fine, cross-hatched texture.

掠奪の初夏

高橋三千綱

新潮社

掠奪の初夏

高橋三千綱



新潮社

掠奪の初夏

著者／高橋三千綱

発行／昭和62年6月10日

2刷／昭和62年7月30日

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社光邦

製本所／大口製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話〇三―二六六―五一一（業務）・五四一一（編集）

振替東京四―八〇八

定価／一一〇〇円



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

掠奪の初夏

装帧

木原いづみ

目次

冬にみたもの	5
春のつぶやき	51
掠奪の初夏	99
秋、センチメンタル	143
冬の螢	187

冬にみたもの

高い空に、雲がふたつ浮いていた。ビルの隙間から見える細長い青空が、まるで天の清流のように思えた。

空気が人魚の肌に触れたように冷たい。朝の光が、五階建のホテルの最上階に当たっている。路上に水を撒きながら、ホテルの半纏はんてんを着た五十近い男は、かつて少年時代に抱いたことのある、冷ややかで、ときめくような朝の瞬間を感じていた。

そういえば、学校を休んで、給食費をネコババして、一人で初めて映画館に入ったのも、冷たくてよく晴れた日だった、と男は思い出していた。

その朝に限って、男がどうして少年時代の日を胸に思い浮かべたのか、自分でも分からなかった。台風くずれの低気圧が日本近海に居坐り、まる一週間、雨にたたられた。前夜になって中国大陸から冷たい風に乗った冬型の高気圧が南下して、雨雲を吹き払った。

雨が消えると、同時に秋が去った。男はその年初めて感じる、わくわくするような緊張感に包まれた。そして、初めて見た映画『ガルシアの首』のシーンをいくつか思い出し、薄くなった頭をピンピンと冷たい空気の中において、頬をゆるめて空を見ていた。

前夜の新宿の喧騒は雨に流され、口を含む空気に清新な都会の香りが息づいていた。男はふと思つた。

もう一度、映画を作ってみるか。

雨の降り続いていた前の週の初めに、二人目の娘を持った。遅い結婚だったので、照れもありホテルの他の従業員には知らせていなかった。それに、ホテルといつても、連れ込み旅館と同様であり、マッサージ嬢と一緒に寝ない客と当ると不機嫌になった。

男はそんな小さなホテルを二つ、かけもちで働いていた。もちろん、両方の経営者には内緒だったが、特級の免許を持つているボーイラーマンは重宝がられ、本人が地下のボーイラー室にいたくとも、自分がやとつたアルバイトの学生でまにあわすこともできた。男はそうやって金を貯めた。

八年前には、四百万円の資金で十六ミリの制作した。映画はひどい出来で、自分の無能力に泣いた。

五年前に一千万円の予算でスタッフを集めて、再び映画を作りだした。少女と母親と偶然に出会った中年の男との、三人の物語になるはずだった。思いきつて三十五ミリで撮り出したが、途中で資金がつきて、撮影は中断していた。

落ち込んでいるとき、上野のホテルに働いていた女になぐさめられるものを感じ、結婚をした。娘が生まれ、男は溺愛した。

二人目の子供は男の子がほしかったが、それでも生まれた姿を見ると、情が移った。娘はできの悪い猿のようだった。その顔が笑っているように見えただけで、男は父親としての責任と、それほど美しくはならないと思われる娘に深い愛惜を感じた。

十五年たつたら、と男は思つて、ホースを持つ手をとめて、南東に流れていく雲を見上げていた。十五年たつたら、セーラー服が似合う娘になり、胸もふくらんでくるだろう。長女には恋人ができてゐるだろう。そのとき、自分は金儲けの下手だった親父として、娘たちから馬鹿にされてゐるかもしれない。

ホテルの従業員用の出入り口から女主人が現われて、いつまで水を撒いてゐるのだと毒づいた。ボーイ・マンとして雇われていながらも、女主人は、男が掃除を手伝わないと機嫌が悪かった。自分から率先して掃除をするようになると、電気節約を要求し、さらに効率よく働くことを口やかましく言うようになった。

男はヘイ・ヘイと背を屈めて、水道の栓を締め、ホースを巻いた。夜勤明けのぼやけた頭に、冷たい風がなぐさめるように入り込んで、男の目頭を、なぜだか熱くした。

もう一度、高い空を見上げたとき、男は唐突に少女の顔を脳裡に思い浮かべた。どうして、その少女の顔が出てきたのか分からなかった。それに、二年以上も見ていない顔だった。

あのとき、もしかしたら、あの娘は中学生だったのかもしれないと、男は胸の内で呟いていた。何度かホテルの部屋に中年か初老の男と現われるのを見ていたが、その頃は十八、九歳だと思つてゐた。何故、今になって、しかも、今朝に限つて少女の顔を思い出し、その娘が中学生なのだと思つたのか自分自身でも分からなかった。

男は一回だけ、少女の素顔を見たのを思い出していた。普段は厚い化粧をしていたが、その晩は一緒に来た中年の男といさかいを起こし、頭から水を浴びせられ、化粧は落ち、服も水びたしになつてゐた。

騒ぎをしずめるために男は女主人にいわれて部屋に駆け上がり、そこで額を割られて床をのたうちまわっている若いチンピラ風の若造と、狂ったように怒鳴り暴力をふるう三十半ばの男に、必死で組みついていく少女の姿を見たのだった。

水でびったりと張りついた少女の腰が想像していたよりもずっと細く、水に洗われた素顔がとてもなく、いじらしい表情と深い悲しみをたたえていることに気付いた。

それもほんの一瞬のことで、少女はなおも蹴とばそうとする男の身体にぶつかっていき、反対に投げとばされ、ベッドの端に頭を打ちつけて気が遠くなりかけたのだった。

その直後に、泊っていた二人の若者が騒ぎを聞きつけて部屋に入ってきて、狂暴な男をおさえつけ、警察に突き出してくれたのだ。それ以来、娘の姿を見ることがなかった。たしか、騒ぎの途中で、チンピラ風の若造と共に姿を消してしまったのだ。

あの娘は家出してきた娘なのだろうか。あのチンピラは、あの娘のヒモなのだろうか。あの若さで、本当に売春をやっていたのだろうか。それとも、部屋に客を引っぱり込むだけの役目だったのだろうか。

男は水しぶきのかかった半纏を脱ぎ、洗い場の釘にひっかけた。それから、待遇がますます悪くなるこのホテルでの仕事をやめることを考えていた。

そのときには、冷たく澄み渡った空を見上げて思い浮かべた少女のことは忘れていたし、若い二人の男が何故その晩こんなホテルに泊っていたのかという疑問も忘れていた。

映画制作への夢と、家に帰って見る娘の寝顔を想像して、男はただ、頬をゆるめて地下のボイラー室に降りていった。

暗くなつてから、アパートを出た。

十五分歩くと地下鉄の駅に着いた。歩道に佇み、商店街からの光が届かないところで、影のようになつて家路に向う人々を眺めた。何人かの男が背中を丸めて横断歩道を渡りだした。ジャンパーのポケットに手をつ込み、片岡太郎は歩き出した。

短い髪は、少しずつだがちぐはぐに生え出していた。日焼けした肌のところどころが、錆でも浮いたように精彩のない青味になっている。だぶついたトレーニングウェアを着ているが、下肢の筋肉は、歩くたびに盛り上がるのが分かる。

新宿から私鉄で十数分のところにあるが、街道から百メートル奥に入ると、それほど高級ではない住宅街に入る。車の通らない道には街灯さえ灯っていない。

コートの際を立て、急に冷え込んだ気候に戸惑つた会社員たちは、足早にエレベーターのないマンションや、小さな家の中に入っていく。

太郎は男たちの消えてしまった家々を見つめた。そしてそれが寒さのためか、腹立たしさか、見当のつかない内に目頭が熱く曇っていくのを感じた。

踵を返してささやかな商店街に足を向けた。五十歳くらいの婦人が一人でレジ番をしているマーケットの前に立つて、中をのぞいた。肉まんがあつた。のどかな湯気が肉まんの入った器から立ち

のぼっている。

すでに、腹は鳴らなくなっていた。腹の皮は、そのまま背中一枚の皮となつてくつついてしまっている。

どのくらい佇んでいたか分からない。太郎は何か不思議な力に引き寄せられた気がして、中に入っていた。

広くはないが、暖かった。

客は四人いた。男女の二人がレジの前に立ち、買物したものを精算していた。婦人の目が、かごの中の品物に奪われた。

ビニール袋に入った米に手がのびていた。何キログラムあるのか考えてもいなかった。素早くジャンパーの内側に入れた。脇腹と左腕の内側で米の入った袋を挟んだ。

若い二人連れの男女がレジの前を離れた。とつさに太郎は背中を向けた。目の隅に婦人がこちらを向いた顔が映った。

背中が冷たくなった。そのとき、若い娘の叫び声がして、婦人の注意はそちらに移された。

「ごめんなさい。落しちゃった。汚れたのは買うから、ごめんね」

棚に積んであった何かの食料品を落したようだった。婦人がそれに応えていた。太郎は左腕がひどく熱くなっているのを感じながら、寒さの増した外に出た。なだらかな下り坂を、走り出したい衝動にかられながらも、ゆっくりと歩いた。

アパートに戻って米袋を流し台に置いた。額に何か虫でもくつついている気がして手の甲で拭いた。

汗がびっしりとついていた。水を飲み、胸が高鳴っているのを、殺人でも犯してきたかのように感じていた。足が震えた。

すぐには米袋を開ける気にはならず、畳に寝そべった。

天井の隅にくもの巣が張っていた。こんな汚くて狭い部屋の中でも、餌を貪り、人間でいえば自然の恵みの中で自活している生き物があるのを知って、不思議な気がした。

太郎の頭の中は空虚だった。空虚であるのは感じているが、それが絶望からきたものか、夢が閉ざされたことからきているものか、判然としなかった。

ただ、何も浮かばなかった。

顔を横に向けると、流し台の上から、端の方をのぞかせている米袋があった。嬉しくなって、笑った。

少し、気持が落ちついてきた。あとは釜に米を入れ、水で研いでガスに火をつければ、この二日間、願っていたあたたかいメシにありつけるのだと思った。ぬるい唾液が口の中で水あめのように動いた。

ふと、レジにいた婦人の目を思い出した。それが氷を含んだように冷たく動かずにこちらを見ている。バレたかな、と思った。そう考えると足の先はしびれて冷たくなり、背中と胸が同時に熱をもった。

小さな盗みだが、初めてのことであった。それを成したことで、もうどうなってもいいと、つい数時間前まで抱いていた自暴自棄の気持が少し萎えたのを感じていた。

見つからなかったのが幸いだった、もうやめよう。いつもの心細い感情が、自分の気持の大半以

上を占めていた。さらに悪事を重ねようという居直った気持にはなっていない。

荒い気性を持つている半面、チャランポランで、性格的に弱いところがある。だからおれは、監督から信頼をされなかったのだと太郎は胸の内ですぶやくつつ、これまでの野球人生のひとつまひとこまを思い出し、涙をにじませて、別れを告げていた。

さらば、山口のエース。さらば都の西北。さらば、新人戦二イニングシャットアウト。さらばバツティング投手。さらば……。

さらば親父、と胸の内では呟こうとして、太郎の喉は大きな石で塞がれたような気がした。よく苦しそうに咳をしていた父だが、まさか肺癌になるとは想像すらしていなかった。今年の夏、田舎に戻ったときは、背中を揉んでやると、頬に深い皺を刻んで無邪気に喜んでくれた父だった。

親父はもういないんだ。もう……。

この十日間、何十回と思ったことを、さらに呟いていた。それでも、父の葬式を終えて東京に戻ってきた一ヶ月前には、まだ選手生命に望みがあつた。肩の痛みは薄らいでいたし、ハリ医者もしばらく休めばなおるといつてくれたのだった。自分はまだ神宮のマウンドを踏む日のことを、捨ててはいけなと言いきかせてもいた。

肩が上がらなくなり、それは一時的なものではない、と絶望的な宣告を受けた日から三日後、退部届を出した。監督は、なぐさめの言葉ひとつ伝えてくれなかった。

太郎はその日から、捨て犬の心境になった。パチンコ屋に行き、十七番台に坐り、閉店まで玉を弾いていた。

それは、太郎の大学野球部でつけていた背番号だった。

三万二千八百円注ぎ込み、閉店だと知らされたとき、二百数発の玉が残っているだけだった。それで即席ラーメンを八個替えた。それ以来、大学には行っていない。部屋にあった残金は四千円ほどで、それも数日もたずに消えた。

昨年買った十四型のテレビは、質屋で六千円にしかならなかった。五日前にカセットラジオが三千五百円で消え、全ての本も一万円足らずにしかならなかった。その金も、やけではなく、生活費なのだ、と真剣に心をこめてパチンコ玉を弾いた末に、なくなった。

太郎の部屋にあった現金や、金に替えられる品物は、四日前からなくなっていた。

気が遠くなるほどに、腹は減っていた。それでも太郎は動かずに、天井を見つめていた。ノックがあつた。柔らかいあたりだった。

岩か、と太郎は思った。

ドアが遠慮がちに開かれ、大きな目と太った身体がのぞいた。

「どこへ行つていたんだ。ずい分捜したぞ」

太郎は顔だけ横に向けて、ああ、といった。六畳間に足を踏み入れて岩川は流し台の上に置かれた米を見つめた。

「いま終つたのか」

天井を見つめたまま太郎は訊いた。

「ああ。ミーティングが二時間もあつた」

食うか、といって岩川は紙袋を差し出した。あたたかい肉まんが入っていた。一口食い、太郎は喉を詰まらせた。